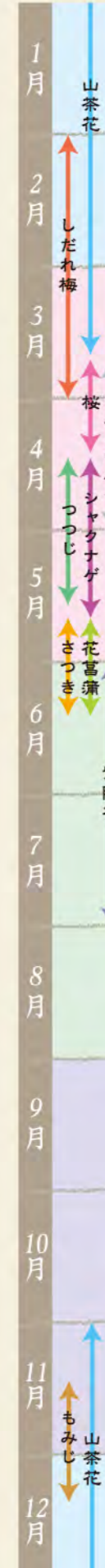


季節をつける花との出会い 花と四季折々の風情



春 Spring
日のどかさに庭園も輝きます



しだれ梅
2月から3月、聚花山の山腹にかけて紅梅、白梅など約30本のしだれ梅が開花します。ときにはメジロが梅の枝でさえずり、春の訪れを感じさせてくれます。



花菖蒲
聚花山の庭や水車の庭の池のほとり、5月下旬から6月上旬に花開きます。りんとした優雅な花姿が池の水と輝かせます。

石楠花
庭園内には約100本、4月中旬から5月下旬にかけて、ツツジに似た大輪の花がたまりになって華やかに咲きます。

利休梅
よく茶花として用いられる花木です。3月下旬から4月にかけて、清楚な白い花が枝いっぱいに咲き誇ります。

夏 Summer
緑陰の水辺にしっかりと花ひらいて



紫陽花
万葉の頃から親しまれた花で、6月から7月に花開きます。淡い青紫色、薄紅色と、雨に濡れた姿は一層鮮やかさを増します。



さまざまな木々
タイサンボク、リキュウバイ、シャクナゲ、イチヨウ、オタフクナンテン、チンチヨウゲ、ツツピキ、サンゴジュ、ヒサカキ、ナンテン、マンリョウ

冬 Winter
白い花が舞い降りたような静寂の銀世界



池をめぐって 季節を 見つける



庭園散策絵図

景色、音、香り 五感で楽しむ 庭へようこそ



① 聚花山

半べえ庭園の南東側、花と緑あふれる標高48mの自然の丘陵。山頂付近までなだらかな遊歩道が整えられ、花を見ながら散策もできます。昭和初期、創設者・金井半が全国から取り寄せた約十萬本のつつじを全山に植樹。以来80年間育成につとめ、いまや300種類を超える様々なつつじが毎年春の聚花山を彩ります。心だれ梅や山茶花も咲き、「たくさんの花が集まる山」という意味をこめて「聚花山」と名付けられました。



② 林泉の庭

約300年前、江戸時代中期に作られた林泉式庭園で、しっとりとした落ち着いた趣があります。昭和42年に一部改築。樹齢350年の楠のご神木と二つの滝があり、傍らの洞からは霊水「延命の水」が湧き出ています。二つの茶室を控えています。



③ 聚花山の庭

聚花山を借景とする池泉回遊式庭園で、作庭家・重森三玲氏が手がけました。日本古来の伝統の中に、現代の斬新な感覚が盛り込まれた庭園です。



⑦ 水車の庭

聚花山へ続く遊歩道沿い、古来からの池庭に回る水車の音が和やかさを誘います。昭和59年に一部改築、重森三玲氏のご子息で作庭家の重森完途氏が手がけています。



⑥ 延命の水

奥行き20mの横穴から湧き出る水は枯れることなく、昔から延命の水として尊ばれています。

茶室



④ 茶室「紅霞亭」

江戸時代後期に建てられた書院式の茶室で、金釘を使用せず木釘のみで手間ひまかけて作られています。「紅霞亭」の名は、秋に部屋から眺める聚花山の紅葉が霞にかかっているように美しく見えるところから付けられました。



⑤ 茶室「聴松庵」

平成7年建築の数寄屋造りの茶室。「聴松庵」とは「松風を聴く」という意味で、茶釜の湯気が、松が風に揺られているような音に聞こえてくることから名付けられました。



⑧ ご神木「幸せの木」

茶室の傍らに立つ樹齢350年の楠の老木。庭園の守り神のように静かに佇んでいます。そとと幹に触れると、幸せの力を分けてもらえた気持ちになります。

灯笼



⑨ 織部灯笼

茶室「紅霞亭」の露地にあり、戦国時代の武將で茶人の古田織部が考案したため織部灯笼といわれます。竿に地蔵尊に似せたキリスト像の浮き彫りがあり、別名「キリスト像灯笼」とも呼ばれます。



⑩ 琴柱灯笼

日本三大名園・兼六園の灯笼と同じもので、7/10サイズです。二股の竿が琴の糸を支える琴柱に似ていることからこの名があります。



⑪ 島

聚花山の庭の池の水中に石組みを立て、島に見立てています。池の真ん中の島が不老不死の仙人が住むといわれる「蓬萊島」。その他、長寿を表すための「鶴島」「亀島」や「出島」を配しています。



⑫ 薬研大井戸

六角苑の手前に東西南北の方向を示した大井戸があります。字の彫り方が薬研彫といい、断面をV字形に彫り込んだものです。薬研とは漢方薬を調製する際、生薬を粉に挽くために用いられた器具をいいます。



⑬ 座禅石

椅子のような形には美しい景色を座って眺めるという意味があります。ここからは林泉の庭を身近に味わうことができます。



⑮ 水琴窟

仏像を彫り込んだ四方仏の流水鉢の形式です。琴のような美しい音が響きます。

入口